



人の役に立つことの喜び

「ひとというものは、ひとのために、何かしてあげるために生まれてきたのです」

宮沢賢治の母・いち

みなさんの家庭では、子どもに「勉強しなさい」「ゲームを止めなさい」「スマホばかり見てはいけません」などのような、指示や命令の言葉が多いのではないのでしょうか？そのような言葉でなく、子どもの生きる道しるべとなるような言葉がけ、できれば、上記の賢治のお母さんのような言葉がけをしたいものですね。



電車やバスに乗って、お年寄りや障害のある方に席を譲ったり、困っている友達がいたら助けてあげたり、道に迷っている人がいれば声をかけてあげたりなどして、人の役に立ち、そのことに喜びを感じる子どもに育ってくれると親として嬉しいものです。そのような子どもに育てるには、どのようにしたらよいのでしょうか？

家庭で手伝いをさせましょう

食事の準備の手伝いをさせましょう。“テーブルを拭く”“箸を並べる”“食べた後の食器を流しまで運ぶ”“皿を洗う”など、いろいろな手伝いがあります。子どもが小さくても小さいなりにできることがあります。できたら、「お母さん助かるわ。今日はお仕事で遅くなったけどあなたのお陰で早く準備ができ、家族みんなが喜ぶわ。ありがとう」という声かけをしてみましょう。

また、洗車の手伝いもいいでしょう。体が小さくてもタオルで車体を拭くことはできます。そして、終わったら子どもに声かけをしましょう。お父さんから、「お陰で、早く洗車が済んだので助かったよ。車が綺麗になったので今度、ドライブにでも家族で行こう。楽しみにな」と。それ以外に、洗濯物をたたむこと、風呂掃除、トイレ掃除など、ある程度の年齢になればできることはたくさんあります。

子どもは、お父さん、お母さんから喜んでもらえたこと、感謝してもらえたことで次も何か喜んでもらえるようにしようという、内からの動機づけとなります。そのことで、お父さん、お母さんだけにでなく、周りの人にも喜んでもらえる行動が取れるようになります。誉められて行動する、叱られて行動する、物をもらって行動をするなど、外からの動機づけでは本物の行動にはなりません。内から湧き出てくるやる気が本物になるのです。そして、子どものときに、人の役に立つことに喜びが感じられるようになった子どもは、大人になっても人の役に立つことが実行できるようになり、そのことにより、人に愛され、人から大切にされる人間になるのだと思います。

もう一つ、「人の役に立つ喜び」に関わる言葉を紹介しましょう。

“他者のことを思えば思うほど、その人のためになることをしたいと思うものですよね。いわゆる「利他行動」です。そして人間はこの利他行動をとることでも、大きな幸福感を得られることがわかっています” 「あなたの脳のしつけ方」中野信子（脳科学者）青春文庫

文責＝青少年育成センター指導員 藤村